

宮沢賢治が用いた副詞「全体」の用法

Usage of the Adverb "Zentai" Used by Kenji Miyazawa

山口 豊

YAMAGUCHI Yutaka

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 17 号 2022 年

【研究ノート】

宮沢賢治が用いた副詞「全体」の用法

Usage of the Adverb "Zentai" Used by Kenji Miyazawa

山口豊*

YAMAGUCHI Yutaka*

要旨

「全体」という語は「ALL」「WHOLE」などの意を持つ「名詞」として用いられることが多いが、「副詞」としての用法も持っている。宮沢賢治の作品にはこの「副詞」の用法が数多く見られるが、そこには一般的な辞書に記載されている副詞の用法以外の用法が用いられている。それは「すっかり」「まったく」「本当に・実に」といった意味を有する用法である。

本稿は賢治作品における副詞「全体」の用例について分析を加え、そのことを明らかにした。さらに同時代の作家たちの副詞「全体」の使用実態を調査することにより、この語も賢治の世界を上げる一つの要素として考えられることを指摘した。

1 1. はじめに

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」

これは宮沢賢治(1896-1933)が『農民芸術概論綱要』の中で述べた一節であり、あちこちに引用されている有名な文である。

しかし、世の中に出回っている引用は、必ずしも正しい表現として用いられているものばかりではないのも事実である。その多くは「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」というものである。

一見、さほど大きな違いはないように思えるが、実は「世界がぜんたい幸福にならないうち」と「世界全体が幸福にならないうち」とでは意味が大きく違ってくるのである。「世界全体が」ととらえた場合の「全体」は「whole」、つまり「すべて」を表す名詞であるのに対し、「世界がぜんたい」という場合の「ぜんたい」は副詞として用いられているからである。

副詞は用言を修飾する働きを持つ品詞であるので、「世界全体が」と名詞でとらえた場合、かかっているのは「世界」という名詞であるのに対し、「世界がぜんたい」と副詞としてとらえた場合、「幸福にならない」と言う部分の動詞「なる」にかかっていることになる。

賢治が言わんとしていることの意味の本筋は「個」と「世界」という両方の幸せについてであるので、漠然としたことはわからないではないが、名詞でとらえると「個人」と「世界」の関係を対立したものとして捉えることになる。一方、副詞としてとらえると「個」は「世界」の中の一部としてとらえることになる。

宮沢賢治の実弟である宮沢清六は『兄のトランク』という本の中で次のように指摘している⁽¹⁾。

「農民芸術概論」の「世界が全体幸福にならないうちは……」これを「世界全体が」と言う人がおりますが、これはいけないそうです。絶対ちがうそうです。「世界が全体」これを「世界全体が」とおっしゃる方がありましたら、どうぞ直してあげてください。それをひじょうに気にする人がありまして「世界全体がという奴は全然、賢治を知らない奴だ」と激しくいう人がありますから、こういう人をおこらせないように、あるいは口実を与えないように「世界が全体幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」というふうに直してください。全くひどいのはおみやげに売っているものにさえまちがいがあります。

それにしても「世界全体が」ととらえて解釈している人の多さには驚かされる。

2018年9月26日付け朝日新聞の文芸・批評欄に詩人の谷川俊太郎が詩を掲載した中にも

世界がぜんたい幸福にならないうちは云々と／賢治は書いたが／世界全体なんてものは言葉の上にか存在しない

と述べている⁽²⁾。

このほかとても多くの人が「世界全体が」ととらえて解説している。

「みんなで学ぶNHK語学フレーズ ゴガクル」にも「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という文の英訳として「Personal happiness cannot exist until the whole world is happy.」という文を示しており、「全世界」と解釈していることもその一例である。

その他、一つ一つを挙げることはできないが、インタ

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

一ネットで検索すれば瞬時に多くの誤引用例が見つられる。

2 辞書の記述

「ぜんたい (全体)」という語は辞書ではどのように記述されているのかを知るために、現在市販されている辞書をいくつか確認した。そこには名詞と副詞の2つの品詞の語として取り上げられていた。次に示すものは『日本国語大辞典』に記載された「ぜんたい」という見出しの副詞の部分の引用である。

〔副〕ある事柄を全般的・概括的に考えていう時に用いる語。一体。一体全体。④結論づけをするような場合に用いる。もともと。もとより。*雲形本狂言・隠狸「全体(ゼンタイ)私は生れ付て殺生は嫌でござる」*咄本・鯛の味噌津・足袋「ぜんたい足袋めが地のよはひでござる」*滑稽本・浮世床一初・上「通人だの通り者だのといふ奴は全体(ゼンテへ)野暮だぜ」*人情本・春色梅児譽美一・一齣「私も全躰(ゼンタイ)おまはんの、養子に行きつたときから、住かへに出たいと思って、気をもんで居ましたけれども」⑤特に、疑問の意を強く表わす場合に用いる。全くわからないという気持が含まれる。*滑稽本・東海道中膝栗毛一発端『ぜんてへ是はどふいふ訳か、さっぱりわからねへ』*当世書生気質〈坪内逍遙〉一〇『向ふの客といふのは、全体(ゼンタイ)何もんじやネ』『たしか代言人だと欺(か)いふ事だ』*坊っちゃん〈夏目漱石〉四「こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しに這入ってるんだ」*暗夜行路〈志賀直哉〉一・八『全体どうしたの?』さう云ってお加代が身を起した時⑥こまかいことはともかく、大づかみに言う場合に用いる。おおかた。おおよそ。*詞葉新雅「ゼンタイ おほかた、おほよそ」

この記述からここには3つの用法が記載されていることがわかる。再掲すれば

イ 結論づけをするような場合に用いる。もともと。もとより。そもそも。

ロ 特に、疑問の意を強く表わす場合に用いる。いったい。全く。(どこ・何などの語と呼応)

ハ こまかいことはともかく、大づかみに言う場合に用いる。おおかた。おおよそ。だいたい

というものであり、他の国語辞典でも似たような用法が記載されている。

では、古語辞典にまで対象を広げるとどうかと言うと、多くの古語辞典には「全体」という語は掲載されていないが、『岩波古語辞典』(1974 初版)には見出し語として掲載されており、

〔副〕総じて。本来。「一この身は不浄を錦に包みたるが如くなるを」〈見聞愚案記 17〉

という例が示されている⁽⁴⁾。1994年の補訂版には用例として「今は一塩なし。何を以てか〔穀類ニ〕かふべき」〈日蓮遺文 上野殿御返事〉という用例も追加されている。『見聞愚案記』は安土桃山・江戸前期の日蓮宗の僧である日重の記した仏教書で、『日蓮遺文』とともに日蓮宗関係のものから用例が拾われている⁽⁵⁾。賢治が熱烈な日蓮宗の信者であったことを考えると、賢治が古典的な表現を踏まえて著作をなしている可能性もあるとも考えられるが、これについては日蓮宗の他の用例との比較が必要であるため、稿を改めることとして、ここではそのことについては触れずにおきたい。

なお、1987年に出版された『角川古語大辞典』第三巻でも「ぜんたい」を見出し語として取り上げているが、こちらは『新古今略注』『白冊子』『浮世床』からの用例が採録されている。

3 用例と分類

「全体」という副詞は今でこそ「一体全体」という言い方で副詞「一体」とセットになって用いられることが多いようである。「一体」だけで用いられることからわかる通り強い疑問を表すのは「一体」の方にある。この「一体全体」というのはいわば地口で、「一体」の対を為すものとしてリズムを整えるために用いられることが多い。従って、「全体」だけで副詞として用いられることは意外と少ないのだが、宮沢賢治作品にはよく登場する。

そこで宮沢賢治が用いた「ぜんたい (全体)」という語をすべて作品の中から抜き出し、それがどのような用法で用いられているかを確認することとした。底本には『宮沢賢治全集』(筑摩書房 1986)を使用した。

宮沢賢治の作品からは94例の用例が確認された。そのうち21例は「名詞」として使用されている。

- あれがいま爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風にもじって地球ぜんたいを包むだろう。(ペンネンネネムの日記)
- その室の右手の壁いっぱい、イーハトーヴ**全体**の地図が、美しく色どった大きな模型に作ってあって、(グスコブドリの伝記)
- そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球**全体**を平均で五度ぐらい暖かくするだろうと思う。(グスコブドリの伝記)
- その人は大へん皮肉な目つきをして式場**全体**をきろきろ見下してから云いました。(ビジテリアン大祭)
- そのうち、話はもう沙車**全体**にひろがり、みんなは子供を雁の童子と呼びましたので、須利耶さまも仕方なくそ

う呼んでおいででございました。(雁の童子)

- ・野原**ぜんたい**に誰か魔術でもかけているか、そうでなければ昔からの云い伝え通り、ひるには何もない野原のまんなかに不思議に楽しいポラーノの広場ができるのか(ポラーノの広場)
 - ・焰が玉の**全体**をパッと占領して、今度はひなげしの花や、黄色のチュウリップ、薔薇やほたるかずらなどが、一面風にゆらいだりしているように見えるのです。(貝の火)
- 21 例中 7 例を示したが、いずれも名詞としての用法である。ということは、残りの 73 例が「副詞」として使用されていることになる。

それらを『日本国語大辞典』に記載された用法に当てはめて分類を試みた。もちろん完全に意味合いが分離できるものではないのは言うまでもない。しかし、あえて最も近いと考えられるものに分類してみると、次のように分類できると思われる。

イ 結論づけをするような場合に用いる。「もともと」「もとより」「そもそも」という語に置き換えられるもの

- ・**ぜんたい**笛といふものは きまぐれなひよろひよりの曾長だ(小岩井農場)
- ・**ぜんたい**春といふものは 気象因子の系列だぜ(実験室小景)
- ・**全体**ひばりというものは小さなもので、空をチーチクチーチク飛ぶだけのもんです。(チュウリップの幻術)
- ・**全体**星というものははじめはぼんやりした雲のようなもんだったんです。(土神ときつね)
- ・**ぜんたい**雲というものは、風のぐあいでは、行ったり来たりぽかっと無くなってみたり、俄かにまたでてきたりするもんだ。(山男の四月)

この 5 例における「ぜんたい」という副詞は「というものは」という語と呼応しており、「そもそも～というものは」と結論づけをする、または型に当てはめようとする思いを表している。

- ・**ぜんたい**その形からが実におかしいのでした。変てこなねずみいろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤い革の半靴をはいていたのです。(風の又三郎)

この用例は「そもそもその形から(して)実におかしい」という、基本的なことに対して根本的な疑問を抱き、おかしいと結論づけるのに用いられている。

- ・けれども**全体**、あなたに聞こえてるんですか、聞こえてるなら頭を振ってください。(シグナルとシグナレス)

この用例では根本的なところに立ち返り、「そもそも聞こえているのか」という疑問をもち、「聞こえていないのだろう」という結論を暗に示している。

- ・それはもう立派な訳がございませう。**ぜんたい**みんなまっ白では、ずみぶん間ちがひなども多ございませう。(林の

底)

この用例も同様であり、「そもそもみんなまっ白では、ずみぶん間ちがひなども多」くあって当然だという結論を導くのに用いられている。

- ・けれども苦しい間は人をたのんで楽になると人をそねむのは**ぜんたい**いい事なんですか。(檜ノ木大学の野宿)

この用例では「そもそもいい事なんですか。(いや、いい事であるはずがない)」という結論を導くために用いられている。

- ・**全体**、あれは請負の岩間組の技師が少し急いだんです。(化物工場)

この用例では「(そもそも)技師が少し急いだ」からこうなると結論づけの根拠を示している。

- ・私らは**全体**いままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をさせられていたのです。(雪渡り)
- ・いい天気だねえ。ぼくは**ぜんたい**森へ行くのは大すきなんだ。(オツベルと象)

- ・**ぜんたい**、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。(注文の多い料理店)

これらの例も「そもそも」という語に置き換えることが可能であり、「むじつの罪をさせられていた」「森へ行くのは大すき」「ここの山は怪しからん」という結論と結びついている。

等、30 例

ロ 特に、疑問の意を強く表わす場合に用いる。「いったい」「全く」という語に置き換えられ、どこ・誰・何などの語と呼応するもの

普段私たちがよく使う用法である。「いったいぜんたい」という言い方で、強意を表すことが多い。たいていは疑問を表す語や不定を表す語とともに用いられる。

- ・それにこんなにたくさんのお菓子を**全体**誰がたべるのだ。(貝の火) 「誰」と呼応
- ・今こっちを焼ぐがらな。**全体**何処まで行ってだった。(種山ヶ原) 「何処」と呼応
- ・**全体**どこへ行くのやら、向うに一本の杉がある(フランドン農学校の豚) 「どこ」と呼応
- ・**全体**きみはどこへ行ってたんだ。(ポラーノの広場) 「どこ」と呼応
- ・ジョバンニは、すぐ返事をしようと思いましたけれども、さあ、**ぜんたい**どこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。(銀河鉄道の夜) 「どこ」と呼応
- ・一郎はおかしいのをこらえて、「**ぜんたい**あなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになって、「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と言いました。

(どんぐりと山猫) 「何」と呼応

- ・何だと。おれをぬすとだど。そう云うやつは、みんなたたき潰してやるぞ。**ぜんたい**何の証拠があるんだ。(狼森と 笹森, 盗森) 「何」と呼応
- ・これは**ぜんたい**どういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。(注文の多い料理店) 「どう」と呼応
- ・こんな星は見たことも聞いたこともありませんね、僕たち**ぜんたい**どこに来たんでしょうね。(シグナルとシグナレス) 「どこ」と呼応
- ・はあ、別段濃いと思わなかったが、**全体**なんぼ位に薄めたらいがべす。(植物医師) 「なんぼ」と呼応

等, 28 例

ハ こまかいことはともかく、大づかみに言う場合に用いる。「おおかた」「おおよそ」「だいたい」という語に置き換えられるもの

- ・ねずみ捕りは**全体**、人間の味方なはずですが、ちかごろは、どうも毎日の新聞にさえ、猫といっしょにお払い物という札をつけた絵にまでして、広告されるのです。(ツェねずみ)
- ・**全体**豚などが死というような高等な観念を持っているものではない。(ビジテリアン大祭)
- ・**全体**きさまはさつきから見てみると、さもきさま一人の野原のやうに威張り返ってゐる。(ポラーノの広場)

以上 3 例

副詞としての使用が 73 例あり、イの用法が 30 例、ロの用法が 28 例、ハの用法が 3 例であることから、残りの 12 例はいずれにも属さない用例ということになる。その 12 例というのが次の用例である。

- ① 熊はそのひまに足うらを**全体**地面につけてごくゆっくりと歩き出した。(なめとこ山の熊)
- ② 第一みかけがまっ白で、牙は**ぜんたい**きれいな象牙でできている。(オツベルと象)
- ③ 皮も**全体**、立派で丈夫な象皮なのだ。(オツベルと象)
- ④ もし、**ぜんたい**、してしまはなかつた人があつても、やはりその儘、持って来るのです。(種山ヶ原)
- ⑤ そうでしょう。**全体**駄目です。どいつも満足の手のあるやつはありません。(チュウリップの幻術)
- ⑥ 自分には自分の着ているものが**全体**見えはしませんからほかの人がそれを見て、さっぱりした気持ちがすればいいのであります。(ビジテリアン大祭)
- ⑦ **ぜんたい**十二月の二十六日はイーハトヴはひどい吹雪でした。(氷河鼠の毛皮)
- ⑧ おれは**全体**川をきらひだ。おれはかなり高い声で云った。(あけがた)
- ⑨ 僕は**ぜんたい**森へ行くのは大好きなんだ。(オツベルと象)

⑩ けれども**ぜんたい**これでいいんですか。あんまり光が過ぎはしませんか。(チュウリップの幻術)

⑪ **全体**こんなにおれの悪口をよるこんで笑ふのはみんなが一人も密造をしてゐないのか。(税務署長の冒険)

⑫ 世界が**ぜんたい**幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない(農民芸術概論綱要)

ということで、この 12 例の用法は一般的な辞書に記載されていない用法ということになると考えられる。では、それはどのような用法として使用されているのであろうか。個々に見ていくことにする。

4 賢治の用いた「ぜんたい(全体)」という副詞の用法について

まずは名詞の意味を色濃く引き継いだ「すっかり」という状態を示す用法がある。

① 熊はそのひまに足うらを**全体**地面につけてごくゆっくりと歩き出した。(なめとこ山の熊)

ここでいう「全体」は「全部」という意味の名詞ではない。もしこれが名詞なら「足うら全体を」となるはずのものである。ここでは熊が足うらを「すっかり」地面につけているという状態を表しているとするべきであり、「全体」という副詞は地面につけた足うらの状態が「すっかり」なのか「一部」なのかということを表していると考えるのが妥当であろう。

② 第一みかけがまっ白で、牙は**ぜんたい**きれいな象牙でできている。(オツベルと象)

この用例の「ぜんたい」は「牙はぜんたい」となっており、「牙全体」ではない。つまり牙の全部の部分を指すものではなく、ここでは「すっかり」という意味で「きれいな象牙」の状態を指す言葉となっている。

③ 皮も**全体**、立派で丈夫な象皮なのだ。(オツベルと象)

もし、「皮も全体が」という表現になっていたら、これは「名詞」としての用法である。しかし、そうではなく、このまま受け取れば、この「全体」という副詞は「立派だ」「丈夫だ」という形容動詞に係っているとみるべきだろう。つまりどのように「立派で丈夫な」象皮だとかというのかという「状態」を表した副詞であると捉えることができる。その「状態」として一部ではなくすべてが、つまりは「端から端まで「すっかり」という意味を込められていると考えられる。

④ もし、**ぜんたい**、してしまはなかつた人があつても、やはりその儘、持って来るのです。すっかりしてしまわなかつた人は手をあげて。」(種山ヶ原)

この用例は、「最後までできていない」ことを問うているのであって「全然していない」ことを問うているのではない。最後まで完璧にできたら「全部」つまり「すっかり」

できていることになるわけで、この「ぜんたい」は「してしまう」にかかっている副詞であると考えられる。その証拠に続く文では「すっかりしてしまわなかった人」と言い換えていることから「すっかり」という意味であることがわかる。

これらの用例は名詞「全体」の意味を多く残した「すっかり」という意味を持った副詞の用例であると考えている。

次は後に否定の語と呼応して「まったく」という強調の意を持つ用例である。

⑤ そうでしょう。**全体**駄目です。どいつも満足の手のあるやつはありません。(チュウリップの幻術)

「駄目」という否定的な意を持つ語を強調した表現である。さきほどの「すっかり」という思いは残しながらも否定を表す言葉と呼応して「まったく」という強意を表している。

⑥ 自分には自分の着ているものが**全体**見えはしませんからほかの人がそれを見て、さっぱりした気持ちがすればいいのであります。(ビジテリアン大祭)

この場合は「見えはしません」に係り、どのように見えないのかという程度を表している。そしてその程度は100%であり、「まったく」「さっぱり」見えていないことを表現しようとしたものと考えられる。

そしてさらに「本当に」「実に」という意味を表す「全体」の用法がある。

⑦ **ぜんたい**十二月の二十六日はイーハトヴはひどい吹雪でした。(氷河鼠の毛皮)

この用例の「ぜんたい」は「ひどい吹雪」に係っているが、その吹雪の激しさと言ったら「本当に」ひどいものだったという実感を込めた表現となっていると思われる。

⑧ おれは**全体**川をきらひだ。おれはかなり高い声で云った。(あけがた)

この用例はイの「そもそも」と結論付けていう用法ともハの「だいたい」と大づかみにしていう用法とも取れるが、ここでは「きらひだ」という自分の思いに実感を込めた言い方としての用法として採りあげた。

⑨ 僕は**ぜんたい**森へ行くのは大好きなんだ。(オツベルと象)

象が気持ちを打ち明けた時の言葉である。この「ぜんたい」は基本的な意味である「総じて」「そもそも」と置き換えが可能であるようにも思えるが、象がこの言葉を喜んで発した場面であることから限り「総じて」などでは意味をなさず、「大好きなんだ」を強調する言葉として用いられていると解するのが妥当だと思われる。

⑩ けれども**ぜんたい**これでいいんですか。あんまり光が過ぎはしませんか。(チュウリップの幻術)

「本当に」いいのかという強い疑念をためらいがちに述

べる場面である。「すっかり」でも「まったく」でもなく、「そもそも」でも「だいたい」でもない。

⑪ **全体**こんなにおれの悪口をよるこんで笑ふのはみんなが一人も密造をしてみないのか。(税務署長の冒険)

この用例に係っていく先は「よるこんで」でもなく「笑ふ」でもなく、「密造をしてみない」という部分であり、その事実に対して「本当に」という思いを付け加えている。

⑫ 世界が**ぜんたい**幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない(農民芸術概論綱要)

「世界が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という表現を考えた場合では「幸福」の程度は示されていないが、「ぜんたい」という副詞を加えることによって「本当に」という状態を賢治が強く願っていることがわかる。

このように辞書にあてはまらない用例が多数見られるのは賢治作品の特色ともいえるだろう。

5 同時代の童話作家たちとの使用頻度比較

副詞「全体」を特殊な用法として用いるのが宮沢賢治作品の特色と述べたが、はたしてそれはいえるのだろうか。

それを調べるため、賢治が「農民芸術概論綱要」を記した1926(大正15)年と同時期に刊行された大正期の童話にその用例がないかを調べることにした。

調査の対象としたのは鈴木三重吉主宰『赤い鳥』第16期、第17期(大正15年1月号～12月号)所収の以下の作家である⁶⁾。(五十音順)

〔童話・読み物〕 青木健作 秋田雨雀 有島生馬 伊従登美子 伊東文雄 入田整三 岩田ひろむ 宇野浩二 宇野千代 江口渙 大木篤夫 小川忠之助 小川未明 小山内薫 小野浩 角田新 加能作次郎 河合その子 川口松太郎 木内高音 楠山正雄 久保田万太郎 小島政二郎 斎藤吉三 坂田匏瓜 佐藤春夫 市上さわ 島村荃三 下村千秋 上司小剣 杉山正賢 鈴木善太郎 鈴木三重吉 瀬沼寛二 相馬泰三 高浜虚子 丹野てい子 茶本七郎 塚原健二郎 豊島興志雄 長島辰夫 長田秀雄 中村星湖 波岡五十三 野上豊一郎 ヒロヤマサミ 福永渙 細田源吉 細田民樹 松居松葉 水木京太 水島爾保布 三宅周太郎 宮島資夫 宮原晃一郎 森田草平 横川一馬 吉田絃二郎 米山光時 渡邊幸

調査した全169編の童話・読み物には「ぜんたい、全体、全體」という語は使用されていない。

〔科学〕 内田亨 内田恵太郎 大関竹三郎 木下信 栗本彌彦 篠原進三 下條喜一郎 下村勇吉 杉岡久男 田中薫 水野静雄 村上保行

調査した全22編の科学啓蒙の文章からは次のような用例があった。

・山を低くし、いたゞきを圓くし、全體をにぶい感じのものにしてしまひます。(田中薫「自然の風景」16-1)

〔談話・評〕 北原白秋 下村勇吉 鈴木三重吉 成田為三 山本鼎

調査した全 12 編の講評からは次のような用例があった。

・これといふ突つこんだところがなく、全たいにわたつて具象と活現とがひどく稀薄ですが、(鈴木三重吉「綴方選評」17-2)

・木炭紙全體の水彩大作、全面に注意がとゞき、(山本鼎「自由畫選評」17-2)

・全體としての表現もとゞのつてゐる。(北原白秋「童話と自由詩について」16-4)

このように同時代に書かれた『赤い鳥』には「全体」という語の使用頻度は極めて少なく、賢治が用いているような副詞の使用例は見当たらなかった。

調査の範囲がごく限られた時期の、それも一つのジャンルのものであるので、推測の域を出ないが、それでも他に一つも副詞としての用例が見つからないことからして、「ぜんたい(全体)」という語を副詞として使用するの宮沢賢治の作品世界を形成する一つの特徴的な語彙であるといえると考えている。

6 まとめ

名詞から派生した副詞の用法は「総じて・本来」という意味から、結論付けする意を表す用法、疑問の意を表す用法、大づかみであることを表す用法へと分化した。しかし、賢治の作品世界においては、「すっかり」「まったく」「本当に」といった意味にまで分化していることがうかがえた。そうしないと、辞書にある従来の用法では賢治の思いを十分にくみ取り切れないからである。

副詞「ぜんたい(全体)」という語を同時代の作家たちがあまり使用していないにも関わらず、賢治は 93 例もの用例を作品の中で用いており、しかも辞書には記載されていない用法で用いることからして、この語の使用はやはり宮沢賢治の特色の一つであると言ってもいいだろう。

これには小島聡子が「『賢治童話の表現研究 一副詞「まるで」を手掛かりとして—』という論文の中で賢治の方言性を指摘していることと何か関係があるのかもしれない⁽⁷⁾。

しかし、まだ詳細な調査はしていないものの、方言辞典などにはこの語は取り上げられていない⁽⁸⁾。今後方言としての使用実態なども視野に入れた調査が必要になると実感している。

以前私は副詞「まるで」という語が賢治特有の世界を作り上げている要素の一つであることを指摘した⁽⁹⁾。

今回取り上げた「ぜんたい(全体)」という語も「まるで」と同様、賢治世界を作る重要な語であると考えている。

それだけに、本稿の冒頭で述べたように「世界全体が」と名詞でとらえるのではなく、「世界がぜんたい」と副詞でとらえることがなによりも宮沢賢治の想いを正しく伝えることになるかと確信している。

注

- (1) 宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房、1987、p.100
- (2) 谷川俊太郎「どこからか言葉が」朝日新聞 2018年9月26日付け夕刊
- (3) 『日本国語大辞典』第12巻 小学館、1974、p.164
- (4) 『岩波古語辞典』岩波書店、1974、p.730
- (5) 『岩波古語辞典 補訂版』岩波書店、1994、p.750
- (6) 『赤い鳥』CD-ROM版 大空社、2008
- (7) 小島聡子「賢治童話の表現研究 一副詞「まるで」を手掛かりとして—」『国際児童文学館紀要』11 財団法人大阪国際児童文学館、1996、pp.71-87
- (8) 『全国方言辞典』(東京堂出版 1951)、『日本方言大辞典』(小学館 1989)、『現代日本語方言大辞典』(明治書院 1993)には記載なし。『日本語方言辞典』(東京堂出版 1996)には千葉、仙台、大分の例が記載されている。
- (9) 山口豊「宮沢賢治童話における「まるで」の用法」『学校教育センター紀要』第6号、武庫川女子大学、2021